

〔巻頭言〕

## SPF 豚生産の共通認識

井 上 忠 恕

第18回日本SPF豚研究会の総会で、会長に推挙いただきました井上忠恕です。

私は、これまで北海道大学獣医学部、家畜衛生試験場（後に動物衛生研究所）で主に臨床繁殖学や生産病に関する研究を行ってきました。その後は5年余り(社)農林水産技術情報協会に在籍して国内で発表される農林水産関係の研究論文のデータベース化に関わり、SPF豚研究に直接携わったことはありませんでした。

この間、南米ウルグアイに縁があって1996年10月から国際協力事業団（JICA）の同国獣医研究所強化計画にチームリーダーとして3年間参加しました。当時、ウルグアイは経済事情の悪化により家畜伝染病診断に関する実施、研究体制が立ち後れており、悪性伝染病の蔓延による経済的および疫学的影響が危惧されていました。このため我が国に対して、重要伝染病診断技術を移転、改善するとともに研究者を養成することを目的とするプロジェクト方式技術協力の要請がなされました。いくつかの要請のうち、獣医研究所として再現性の高い診断、研究成績を得るためには、遺伝的、微生物的に統御された高品質な実験動物およびそれらを飼育、繁殖し得るSPF実験動物舎の新設が強く要望されました。JICAではそれまで数カ国に実験動物舎を供与してきましたが、その多くが日本人専門家の引き揚げとともに感染症など

による汚染や設備のメンテナンスが続かないことなどにより正常に機能していませんでした。そのためJICAはウルグアイへの実験動物舎の供与にも難色を示しましたが、経費を節減し継続できる計画をカウンターパートの熱意とともに提案することによりやっと実現することになりました。そこで、新実験動物舎が稼動する前に実験動物の専門家とともに動物飼育に関わる職員への基本的な教育を繰り返し行い、SPF実験動物飼育の共通認識を確実にしました。特に、動物舎の建物への入退出時の履物の交換はその習慣のない南米人にとって煩わしかったようですが徹底してもらうことにしました。SPF実験動物舎の建設は当時のウルグアイでは初めてで、完成時には大統領も視察に訪れました。こうして2001年には5年間のプロジェクトは終了しました。

時はめぐり、2007年頃JICA関係者の間で「ウルグアイの実験動物舎はもう稼動していない」と言う噂がひろまっていたそうです。その頃、プロジェクトの業務調整員として最初から最後まで骨を折っていただいたY氏が丁度パラグアイに滞在していましたが、この噂の真偽を確かめるために休暇をとってウルグアイへ飛びました。同氏からの報告によれば動物舎は以前と同じように順調に稼動しており、現在では微生物や感染症研究の世界的権威であるパスツール研究所（本部はフラン

ス)のモンテビデオ・パスツール研究所(ウルグアイ)へもSPFマウスを供給しているとのこと。動物舎飼育室内の空気圧などを示すいくつかのメーターも正常範囲を示しておりメンテナンスを行う技術者の協力も得てうまく管理されていることがわかりました。動物舎の入り口には外履靴が並べられていて、中にはスリッパが用意されており、私たちが繰り返し指導していた入退出時の履物の交換は完全に引き継がれておりY氏には感動的だったそうです。

SPF豚生産においても農場の清浄化を維持するには様々なハード、ソフトが絡み合って成り立っておりますが、なかでも人が介在して清浄化を乱すことが原因となっている場合が多いと思います。私どもが体験したウルグアイでの実験動物舎のケースは、外部からいろいろな病気などを持ち

込まないよう動物舎への入退出時の履物の交換からはじまるSPF化の基本理念を全員が共通認識として持ち続け実施することが何よりも必要である、ということをお話してくれています。

SPF豚研究会は、SPF豚生産に関する調査研究について生産現場から研究者に至る幅広い情報を交換する場と理解しています。最近では、BSE、さらには鳥インフルエンザなどの発生問題などをきっかけとして、消費者の畜産物への安全・安心に対する関心がこれまでもなく高くなっています。一方では、飼料や燃料費価格の高騰などにより生産現場ではいろいろな問題がおきています。このような時に、安全・安心でしかも効率的な生産を目指したSPF豚の研究は一層注目される所です。本研究会がSPF豚生産の共通認識の礎になればと思います。